

中口をつなぐ万里茶路

● 放眼日中 ●

東京で、日本在住中国人を対象にしたセミナーで話をする機会を得た。お題は「万里茶路を行く」中国からロシアまでお茶ストーリー」で、清代に中国の茶葉が今のモンゴルを経由して、ロシアのサンクトペテルブルクまで運ばれた、その歴史だった。この企画、何しろ日本人が中国人に向かつて中国の歴史の一端を説明するのだから大胆だ。ただ、このルートはシルクロードなどと違い、近年にわかにクローズアップされており、恐らく中国の歴史の教科書にも多くは登場していないと踏み、お受けした。結果としては「中国の歴史を新しく知ることができた」など、おおむね好評だったと聞く。

因みに、筆者のこれまでの経験では「中国人は歴史に詳しい」というのは日本人の誤解であり、「一般中国人はある特定の刷り込まれた歴史以外、自国の歴史をそれほど知らない」と感じている。どうも我々は「中国四千年の歴史」や「歴史教科書問題」などに引き摺られていたのかも知れない。ある日本の大学教授が「中国の歴史学者はコピペ暗記型が多く、学会でちょっと新説を披露すると、対応できない」と言っていたのが印象に残っている。

「万里茶路」といつてもピンとこない人が多いと思うが「お茶のシルクロード」などとも呼ばれ、18世紀から20世紀初頭まで約200年間の茶葉交易ルートを指す。お茶というのは近代史において、ヨーロッパやアメリカが競ってその獲得を目指し、莫大な利益をもたらした世界的な戦略物資。当然海からも運ばれたが、ロシアへはこの陸のルートが存在したというわけだ。

かの女帝エカテリーナ2世も、このルートで運ばれた福建の最高級紅茶を味わったのではないかと想像している。中国でこのルートが注目されたのは、経済が大きく影響している。10年前に、プーアル茶を馬に乗せてチベットや北京に運ぶ茶馬古道という道が注目され、その流れでプーアル茶が人気となり、高値で取引された。各地の茶業者、特に後発醸の黒茶と呼ばれる従来それほど人気のなかった茶を作る産地では、このブームを利用してしようと、町興しの黒茶作りが盛んとなる。

近年開かれる万里茶路サミットには、中国、ロシア、モンゴルの50都市以上が参加し「如何にこの歴史的資源を利用して茶葉を売り込み、観光客を誘致できるか」を議論しているという。

また、政治的にも脚光を浴び始めた。中国の習近平政権が打ち出した「二帯一路」政策で、歴史的な海と陸のシルクロードを復活させようと呼び掛け、アジアからアフリカまで盛んな投資・開発を行っているが、実はロシアとモンゴルに対しては「二帯一路の第3の道」として、この万里茶路の復活を提唱している。

習近平主席がモスクワで「万里茶道」と発言したので、現在はこの名称が正式となっており、ロシアとの接近を図る強いメッセージとなっている。

万里茶路の歴史は決して懐かしさから復活したのではない。関係する都市の経済的な町興し需要、国家ベースの外交的需要など、幾つかの要素が組み合わさり、盛り上がりを見せている。歴史とは経済的な裏付けが伴って掘り起こされるものだとつくづく感じる。



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。